

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 庄子 凜

たった3週間ではあったが、語学面としても、そしてそれ以外の面としても、その短期間からは考えられないほどあまりに実り多いものであったと思っている。

私の第二外国語はドイツ語であり、このプログラムの事前語学研修が始まるまではほとんど中国語に触れていなかった。1, 2回生の中国語選択の同学たちに後塵を拝する形となりながらも、事前語学研修や現地の授業を通してほんの少しではあるが意思疎通ができるレベルまで持ってくることができた。

今回強く感じたのはソフト的な学習環境の重要性である。周りに同様に努力している初学者が居ることで、自分も彼らに置いてかれまいと勉強する動機になった。そして周りに普通話を私よりはるかに理解している人が多かったことで、質問しやすく、それと同時に「彼らに追いつきたい」という意志を強化しえた。周囲がどう勉強しているのかというのを観察しつつ、自分がこれまでどう外国語を学習してきた、何が失敗して何が成功したのか、というのを思い返しては学習法を考え続けながら勉強する日々だった。更に買い物や道案内の場面で習ったことをすぐ実践につなげることもできた。おかげで短期間ながらも多くの語学的な成長を得られた。また何よりもそうした成長から言語を学習する醍醐味、現地の人との会話できたのは大きい。英語ができればいいや、と英語だけで非英語圏の海外に繰り出すことの危うさ、つまらなさ、勿体なさを理解した。

そんな香港での普通話の学習だが、香港の現地で暮らす人々の話す言語は広東語がメインで、地元の人向けの食堂などに行くと普通話ですら通じないこともままあった。そして一部の香港の人たちがそれなりな信条を持って普通話を話さないことにしていることも知った。ここにおいて私は「なぜ香港で普通話を学んでいるのか」というこのプログラムの根本的なところに疑問をもちつつあった。そんなときに週末を活用して深圳と澳門に行く機会を得た。前者に関しては完全なる普通話の世界で聞くもの読むもの全てが教材であった。後者も内地からの観光客が多く、街角では主に普通話が飛び交っていた。「こっちで学べたら」と思わずにはいられなかった。

しかし特に深圳に関しては英語が全くと言っていいほどに通じず、更に向こうの人の話す普通話は香港の人のそれに比べ格段に速く意思疎通に四苦八苦した。先述の香港の市中での語学の実践が可能だったのも、どれだけ普通話の知識量が少なくても英語を混ぜればなんとかなるからという側面も大きい。そういう意味で初学者にとっては英語がそれなりに通じる香港がとてもちょうどよかった。そしてもっと普通話を学んだうえで内地に赴きたくなった。「初めての中国」「初めての中国語」にはこれより適切なプログラムがあるだろうか。

明確に進路への影響があるかは分からないが、久しぶりに全身を満たしてくれるような「知らない地域を知る楽しさ」を覚えた。香港についてもっと知りたい、中国の内地をもっと知りたい。もっと言語を勉強してもっといろんな地域を知りたい。この「地域への好奇心」をもっと正確なものにして自分の興味のある分野に引き寄せてどういう分野の何を研究したいかを改めて考えたい。